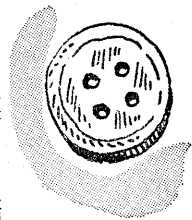


できる者もできない者も

—教育の中における障害児差別について—

福井達雨



☆ 乱暴な子どもは困ります

私の住んでいる所は、人口一萬五千ほどの小さな町で、幼稚園が一つある。

次男生が成長し、幼稚園に通う年になった。家内が、その幼稚園に入園願書をもらいに行くと、主任の先生が出てこられ、

「おたくのお子さんは、この幼稚園でお断りしたいのですが」

と言われ、びっくりしてしまった。

「どうしてでしょうか」

「どうしてと言われても説明に困るのですが。生ちゃんは、乱暴なお子さんだと、町の人から聞いています。しつけのできていない乱暴なお子さんがここに入ってくると、他の子どもが迷惑しますから」

「どうしてもダメでしょうか」

「そうですね。ここでは、何でもよくできる子どもは入園させますが、いろいろなことができない子どもは、ちょっと困るんです」

生は、どうしても幼稚園には入園できなかった。

私たちは、小さな田舎町に住み、そこで障害児教育をしているために、いつも町の人のうわさや話題にのぼることが多い。この中で生は、生まれた時から、重い知恵おくれの子どもと共に育ち、この子どもたちと肌をぶつけ、汗を流し、身体を汚して、はだして走り歩くことが多かった。

大きな木に登り、前の小川に魚が入ってくると、服をずぶぬれにして、魚つかみに熱中する。夏になると、真黒になってカブトやセミをおいかけます。服を汚し、破る。ひざ小僧はすりむける。時々、重い知恵おくれの子どもとケンカをし、泣いたり泣かされたりする。

それでも、自然の中で遊ぶのに夢中である。

このような生いに対して、幼稚園の主任の先生は、乱暴な子どもと言われたが、私は、不思議でたまらなかつた。

私は幼い時、長男や次男のように、服を破り、汚し、ケガをし、川や、野原や、山を走りまわつた。夕方おそくまで遊びすぎて、母視に叱られ、ご飯も食べさせてもらえず寝かされた思い出が何度もあり、今、それが楽しい思い出として、心に残っている。

そして、その遊びや、ケンカを通して、広がりをもち、仲間や秩序を知り、他者と共に生きることを教えられた。豊かなロマンと、深い希望と、強い忍耐をもつことができた。

自分の身体をぶつけて遊べる子どもを、「乱暴な子どもだ」と、捨て、おとなしく、服も汚さないで遊べる子どもを、「よい子どもだ」と、おとなのつくった規格世界にあり子は、「できる子ども」として扱われ、その世界からはみ出る子どもは、「できない子ども」として捨てられてしまう。

できるかできないか。できない子どもは捨ててしまえ教育。この教育の中で、どんな子どもが生まれ、どんな人間が成長するのであるか。自分の世界しかない、利己的な人間が育つのではないだろうか。

私は、シミシミと悲しみを感じた。

☆ 捨てられる教育

現代教育は、幼児期から「できる子ども」「できない子ども」という選別が生まれ、できない子どもは捨てられてしまう。

障害児教育をする私たちは、この、できるかできないか教育に、たまらないものを感じている。現代は、あまりにも教えるという要素が、教育といわれる中で強くなってきた。この教える世界では、できない者は、できる者の邪魔になってしまふ。また、教える世界は、方法論や技術論が優先され、それによって教育がつかさどられてしまふ。

しかし、このような世界は、教育の世界とはいえないのではないだろうか。

邪魔者がでたり、方法論や技術論によってつかさどられるもの、それは授業であり、勉強である。授業や勉強は、教育ではなく、教育の一部分である。教育とは、方法論や技術論をつかさどる心である。心によって、子どもの中から創り出される世界。ここに教育がある。

現代社会は、目に見える方法論や技術論、すなわち現象面を大切にし、目に見えない心や本質を忘れていく傾向にある。この世

界では、できない子どもは「邪魔者」「役にたたないアホナ子ども」「ゴクツプシ」「生きる屍」、このような目に見える肉体的な見方がされ、目に見えない生命や、心が無視されてしまう。しかし、この子どもたちは、肉体でなくて、生命なのである。

私は、重い知恵おくれの子供の教育の中で、目に見えないものの大切さを、シミジミと感してきた。

重い知恵おくれの子どもの教育は、現象面的に、頭のよい子のようにしていく教育ではなく、「立派な重い知恵おくれの子どもを創る」教育なのである。この子どもたちは、この子どもたちなりに、目に見えないものの中にすばらしい賜物をもっている。それをひき出し、この子どもたちが、胸をはって、重い知恵おくれの子どもとして歩む教育を進めたい。

☆ 死んでいる子ども

先日、私はある小学校に心理判定に行つて、目に見えないもの、心が死んでいる子どもの多いのに驚いた。

「おたくのお子さんは、死んでいますね」

と私が言うと、母親たちは、真面目な顔で、

「とんでもない。こんなにピンピンしています」

「イヤ、肉体はピンピンしていても、目に見えない心が死んで

いるんですよ。肉体の病気だったら、今ごろあなたは、病室でワ
ーワー泣いているでしょう」

こう言つても、母親たちは、平気な顔をしていた。
心理判定が終わり、授業の一コマを見せてもらい、また驚い
た。

先生が、一生懸命に字を教えているのである。よく見ている
と、そのむずかしい勉強についていけない子どもが半分位いて、
他のことをやっている。先生は、それを無視し、どんだん字を教
えていく。そのスピードの速いこと。ふりむかない。立ちどまら
ない。参観している母親たちの中で、このグループの子どもたち
の母親は、恥ずかしそうに下をむいている。

これは、大変なことだと思つた。

しかし、もっと恐ろしくなつたのは、誇らしげに見ている母親
たちの子どもグループ。よくできる子どもたちの姿なのである。

できる子どもにとつても、この勉強はむずかしく、必死になつて
ついていっている。できない子どもを助けようとすると、そのス
ピードに自分がふりおとされるので、ただ、自分だけという姿勢
の中で、他の友だちやできない子どもは、無視し、知らない顔で
ある。この子どもたちがおとなになった時、日本はどうなるので
あろうか。利己のみが先だつ人間が育つてしまうのであろう。

こうして、現代の教育と称するものは、できる子どもの目に見えない心を殺し、頭でっかちな子どもをつくってしまう。

私は、この勉強を見て、障害児はいつでも差別され、幸にならな
ないと思つた。障害児の差別をなくそうと叫んでいる私たちは、
この日本の勉強の中で育つ子どもたちに、何の期待ももてないこ
とを思う。それでも、教育は、どんなにダメだといわれるもの
にも、可能性を信じ、努力する世界である。期待がもてなければ
ないほど、その努力の必要性をシミジミと感じたのである。

☆ できる子どももできない子ども

現代の教育の中で、できる子どもたちが、目に見えない心をな
くしていく。しかし、重い知恵おくれの子どもたちが、そのなく
しつづめるものを豊かにもっている。できる子どもとできない子
どもが、共に歩んだ時、両者のもつよさが、交流され、両者が生
かされていく。教育の世界は、できる子どもができない子ども
を、もつ者がもたない者ではなく、できる子どももできない子
どもも、もつ者ももたない者も、共に生きる世界である。

次に考えなければならないことは、障害児教育は、教育の始ま
りであったということである。私たちは、皆、生まれた時、機
能、感情、言語、すべてが未分化であり、大小便たれ流し、ヌー

ドになつても恥ずかしくなかつた。この時期、抽象観念や、言葉
でない、皮膚接触や感覚を通して教育をうけた。この教育が障害
児教育である。

幸か不幸か、私たちは頭がよいために、分化が早くすすみ、抽
象観念教育をうけるようになった。これを、普通教育とよんでい
る。人間にとつて、教育の始まりは障害児教育であり、そこから
普通教育が育つた。だから、障害児教育を無視した教育はない。

普通教育をする先生たちが、一度障害児教育をし、普通教育に
すすまれたら、手に豆を作り、額に汗し、自分の身体を汚す、教
育者本来の姿勢が生まれ、イキイキとした子どもの全人格を生か
す教育が生まれ、現代のまちがった教育が、是正されるのではな
いだらうか。できる子どもとできない子どもが、共に歩む教育
は、できる子どもも、生かす教育なのである。

次男生は、保育園で幼児教育をうけ、今、小学校二年生になつ
た。この夏も、真黒になつて、昆虫をおいかけまわし、飼育に骨
身をけずっている。

「ぼく、将来、昆虫学者になるで」と、大はりきりである。

注「できる子ども、できない子ども」とは、現代の学校でいわ
れる「頭の良い子ども、悪い子ども」という意味で使いました。